

演劇活動における心理的援助の可能性

ーある元ひきこもり男性の事例からー

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域

演劇は、古くから人間の生き様を伝えてきた芸術形態である。また、心理療法の場にも、サイコドラマやロールプレイといった形でその要素が取り入れられている。演劇は、我々のところをどのように映し出し、また、そのことにはどのような効用があるのだろうか。

本研究で扱う演劇は、「脚本を用い、上演に向けて稽古を重ねる集団」によるものとする。すなわち、即興劇スタイルのものや、上演を目的としていない演劇は除外する。「脚本というテキストの存在」と「定期的な稽古時間」は、役者が役柄を演じる上の重要な「枠」となり得るものであり、これを重要視する結果である。

本研究では、長年のひきこもり生活を終えたある男性（トシユキ、仮名）に焦点付ける。演劇の稽古から本番までを共に過ごすことでの参与観察と、インタビュー調査とを併せて事例研究を行ったのでこれを報告する。さらに、演劇活動がひきこもりの青年にとってどのような意味を持ち、また彼らにどのような援助の可能性を示すことができるのかについて総合的に考察する。

我々は、社会生活の中でそれぞれに役割を担っている。小松(1990)によれば、「自己とは何か」と考えるとき、我々は決してこの役割から逃れることはない。しかし、「自己」は役割に埋没するだけの存在ではなく、むしろ、役割をどう操作しているかというところにこそ、「自己」が見出されるのである。そう考えるのならば、我々が「自己」を見出すためには、社会的役割を獲得することが重要な意味を持ってくる。しかし、それはひきこもりの青年にとって、なかなか困難な仕事である。この問題を解決する手がかりを演劇は持ち合わせているだろうか。

演劇によって表現される脚本の世界は「小社会」である。脚本に添って役柄を演じることで、役者はこの小社会に生きることができる。ひきこもりの青年たちにとって、擬似的な役割を手に入れ、その中での関係性に生きることが、現代社会に適応するための貴重な足がかりとなるだろう。

しかし、与えられた役柄を機械的に演じていても、脚本の世界に生きることにはならない。そのためには、与えられた役柄を通し、小社会での役割を「獲得」しなければならない。役割を獲得するとは、すなわち、主体性をもってその役柄を演じるということである。自己を役柄の中に埋没させるということではない。役柄を自己から対象化し、理解する。そしてそれによって浮かび上がった自己を役柄の視点から再考すること。その上で自己を役柄に投げかけ、自己を役柄の中に映し出していくこと。このような「自己」と「役柄」の間で複数回の視点の移動やその循環を行うことで、役割はようやく役者のものとして獲得されるのである。

自ら演劇をすることを選択したわけではないトシユキは、演劇への「やる気のなさ」を

訴えながらも、徐々に「自己」の側から「役柄」の側へ、その視点を移していく。頑なに閉じた「自己」が緩み、やがて「役柄」が自己に侵入してくるのを許すようになる。稽古を通し、彼は彼の演じる役柄の視点を持つことに成功し、終了後のインタビューでは、自分と全く違うタイプの人間を演じたことで、視点を変えてみる機会を得たと語った。

しかし、彼は筆者が日々の稽古を通して確認する限り、「役割を獲得する」上で重要な自己を役柄の中に映し出して演じることができなかった。つまり、役柄の中に彼の感情が溢れ出てこない。役柄のなかにトシユキ自身を見ることができないのである。

彼が自らの感情を役柄に映し出せなかった理由として、彼の様々な「守りの体勢」に着目した。すると、彼の周りを守る堅い殻の存在と、昔のままに優等生を生きるがために、自分の感情への向き合い方がわからない、不器用な様子が浮かび上がってきた。前者の「殻」は、他者に侵入されまいと、必死に自己を守っているが、それと同時に、自らの内側があふれ出ないように留める役割をも担っている。また後者は、長年のひきこもり体験を終えて部屋を出た彼がいまだに優等生を演じており、他者の期待に応えることばかりが先行して、自らの内側から沸いてくる感情に向き合い、自分だけのことばに気づく機会が得られていないということだ。

このようなトシユキにとって、演劇をすることの意味は何だろうか。

演劇は、脚本によって規定されたテキストがある。このテキストは、役者の表現の基盤でも、隠れ蓑でもある。舞台上で演じる役柄は自分とは別の人間であり、自己を裸で曝すことではない。しかし、その中に表れるのは紛れもない「私」である。演じるのは「私」であるから、それを越えて演じることはできない。「私」でありながら、「私」でない体験は、役者に安心して自らを表現できる場を与える。また、一定の稽古時間が、それを保障する。この環境の中で役者は、他者によって意味付けされたのではない、自分の内側から沸いてくる感情にじっくり向き合うことができるのである。

舞台の上では殻に守られなくても、役者を守るテキストという枠の存在がある。この枠に守られながら、頑なだった自己を緩め、自らの感情にじっくり向き合う。この体験の場を提供する演劇は、トシユキにとって大変意義の深い場ではないだろうか。彼は、今回の公演において、役柄の視点を獲得することはできた。しかし、自らの感情に向き合い、それを表現するまでには至らなかった。だが、彼がそれを求めるときにはどこまでも追求できる場を、演劇は持ち合わせている。

演劇が提供するのは、様々な感情と出会い直し、それを役柄に統合していく過程で役者自身の感情をも紡ぎなおしていく場である。傷つくことに敏感で、感情を閉じてしまっているひきこもりの青年たちが、この枠に守られて、仲間と共に役柄という人間モデルの肩を借りながら、自らの感情に丁寧に向き合っていく作業は、彼らの援助にとっても大変有意義なことであると考えられる。